

<第2回>Bechstein Klavier Schule 講師向けレッスンセミナー

2018年11月13日(火)、汐留ベヒシュタイン・サロンにて【Bechstein Klavier Schule 講師向けレッスンセミナー】の第2回を開催いたしました。

まず初めに第1回に台風の影響でお越しになれなかった方々の為に、第2回の前に第1回の補講を行いました。



《第1回の補講》

第1回は音楽的演奏の飛躍的な向上の為に「どのような基礎を幼児期から児童期に培うべきか」がテーマでした。

本格的なピアノレッスンを始める前に音楽の三大要素であるリズム、メロディー、ハーモニーを身体と脳にいかにか吸収させるかについてお話いただきました。

カホンを実際に叩いて実演。

リズム：たかまつ楽器ではカホンなどを使ってビートを刻みながらレッスンを行いません。

そうすることで活きたビート感を養い、メトロノームでは表現できない裏拍や拍子感を感じて生き生きと演奏することに繋がっていきます。そして生の打楽器を使用することによって、全ての拍は均一ではないことを感覚的に知り得、ビート感・グルーブ感・拍子感を頭と身体の中に入れることができるのです。カホンが難しければ、シェイカーやトライアングルでも代用できます。

インヴェンションの第1番やモーツァルトの有名なソナタ K545 第1楽章等をカホンとアンサンブルすることで躍動的なビート感を感じて演奏でき裏拍から始まる楽曲でよくやっけてしまいがちな「1音目を強く弾いてしまう」ことにならないということを示してくださいました。



バッハ「インヴェンション第1番」より



モーツァルト：ピアノソナタ K545 第1楽章より

メロディー：多くの生徒さんの悩みの中に片手の練習は上手いくのに、両手になると上手いかない、ということがありますが、その原因は脳が両手の感覚になっていないことにあります。たかまつ楽器のソルフェージュ教材では早い段階からリズム打ちを両手でこなしています。それは思わぬ効果を生み出して、伴奏の上にメロディーがある感覚を養うことができるので、両手での演奏に対して上手いかないということになりません。小さな生徒さんのレッスンではこのテキストを使用したソルフェージュの時間をレッスンの中で必ず設けています。

メロディーをフレーズとして意識させるためにコール&レスポンスも欠かさず取り入れているそうです。更に発展させて時には同じメロディーの真似っこではなく、わざと先生と違うメロディーを歌ってもらうことで将来の即興演奏にも繋がるチャレンジもしてもらっています。音を音符ではなく、メロディーと認識させることが大事で、頭の中でメロディーを意識させることに重きを置きます。いずれも音楽脳の成長を目指しています。

ハーモニー：聴きとり練習では、その瞬間の音符の塊を当てるゲームとしてではなく、横に聴くことで相対音感の獲得と各音を声部として捉えることを目指しています。

そしてトニック・ドミナント・サブドミナントの機能的感覚を養うことで、音楽的な耳と脳を育てるレッスンをしています。

【次回に向けて】

私達は、作曲家は人の心を動かす音楽を作っていて、演奏している自分自身も感動しなければ聴く人の心を動かせない(内藤先生談)を信念としております。

それを元に、音楽から感じたものを表現する基礎を作ることを目指しています。和声が変わった瞬間や遠隔調にいった時、心で感じてその変化を音で表せる弾き手を育てたいのです。

その為に小さい時からドリルのような教材をたくさん延々と使用するのではなく、感動する楽曲・名曲をたくさん取り上げその中から学ぶべきでしょう。

最後は参加者の方の質問コーナーがあり、沢山の質問が投げかけられました。次の時間は第1回の講座を受け、「読譜・音楽の構造基礎～実用へ」です。

第1回で紹介した基礎を踏まえ、いよいよ演奏へ繋げていきます。

《第2回》

10月迄開催しておりましたベヒシュタインジャパンドビュッシーフェイスブックコンクールの動画を見ながら、先生方は4人のたかまつ楽器ジュニアマスタークラスで学んでいる生徒さん達を紹介していきました。生徒さん達はそれぞれ個性や得意な分野があり、
(耳がとても良かったり、楽譜の深い読み込みが得意だったり、感性が豊かな生徒さん等)とても魅力的な演奏です。



演奏動画を見ながらどんなレッスンをしているか説明

マスタークラスではそれを伸ばし、また足りない部分はヒントを出し気づかせていく形で補っていきます。

このことを聞いた時、私達が受けてきた、またはレッスンをしている形と大きく異なることに気づきました。

「レッスンでこのようにしていませんか？」と参加者の方へ下記の質問を投げかけ、一般的レッスン(従来型レッスンと言い換えることができます)とは一風違った方法でレッスンをしている事を説明しました。

①1曲1曲時間をかけて丁寧に細かく指導 →まずざっくりと全体を譜読みしてきてもらう。弾けてなくても大丈夫。楽譜全体を見て観察してもらうことが大事。※丁寧に教えることは大事だが、全部教えてしまうと自分で音楽を考えたりする余地がなくなる。

内藤先生のレッスンでは初めての曲を持って来てもらう時、弾き方ではなく、曲の背景やスタンスなどを伝え、イメージを膨らませてもらうのだそうです。

②テキストを順番に進ませる →本人がやりたい曲をやらせる。または生徒をよく観察して、テキストをチョイス・提案する。

バロックや古典派からレッスンを進めるのではなく、気持ちが動くもの(=自分がやりたい！弾いてみたい！)というものを先にやってもらう。つまり、簡単に言うとツェルニーやソナチネ・インヴェンションばかり延々とやって大きくなってからロマン派を、ではなく心の動きが分かりやすいロマン派を先に弾いていく。

④譜読みの時の先生のお手本は無味乾燥、音とリズムだけを正確に→人を感動させるにはまず自分が感動しなければならない、という言葉があるように、先生が一番美しい・素晴らしいと思う演奏を生徒に伝えるべき。感動してもらうことで「自分もこのように弾いてみたい」「先生みたいに弾きたい！」というモチベーションにも繋がる。

⑤基礎だからと、ハノン・ツェルニーをしっかりとやらせる→もちろん自分の音楽をやるには技術が必要だが、まず欲求が大事。自分が改善しなければならない点は後から必ず気づく。先生はそれを気づかせるレッスンをしてあげることが大事。たかまつ楽器マスタークラスのレッスンではハノンやツェルニーは調性把握や弱点改善の為に使っており、それが主体ではないそうです。

⑥生徒がなかなか弾けないとつい「もっと練習しなさい」といってしまう。

→ただの反復練習は絶対にダメ！どんな、何の為に、という理由が無ければ意味がない。石本先生のレッスンは質問形式で進んでいくので、生徒が自ら考えていく力を育てることができます。

☆最後に内藤先生、石本先生お二人がレッスンの上で大事にされていることを紹介します。

★弾き方を教えない

★弾いてみせる時は最高に音楽的に

★常に「耳」！

★考えさせるレッスン

★語法・音楽言語を身につけられるように

→外国語のようなものなので外国語習得時の文法などのような音楽語法をしっかりと理解する必要がある。

★音楽の普遍性を伝える

→その曲だけを聴かせられるようにするのではなく、他の曲にも応用できるようなレッスンをする。

★音楽で心が動く生徒に

今回は講座の途中でも気になることがあれば質問をしてくださいとのことで、参加者の方から沢山の質問がありました。

その度に先生方は真摯にお答えくださり、従来型のレッスンを覆すようなアイデアなどを聞くことが出来たと思います。

この講座がたくさんのレスナーの方の考え方や心を動かしているのだなと感じました。

アンケートでは「音楽と触れ合っている時、常に頭の中に入れておきたい内容で参加してよかった」、「耳が痛いことばかりだったが、目からうろこでした」と参加者の方からもこのセミナーに参加してよかったというお言葉をいただきました。

次回は実践編として、内藤先生の公開レッスンを開講いたします。

日程は後日ユーロピアノ HP やベヒシュタインジャパンホームページにてご案内する予定です。第3回目からのご参加も大歓迎ですので、皆様のご参加を心よりお待ちしております！